

おもいでは みらいへつづく おくりもの
きせつとともに めぐりめぐりて

季節のことは36選

平成 25 年 4 月

一般財団法人 日本気象協会

はじめに

たくさんの方の季節のことばを応募していただき
本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本気象協会では、平成23年（2011年）2月より、現代の季節感にあう「新しい季節のことば」を提案するための取り組みをおこなってきました。そして、平成24年（2012年）8月～12月には、「あなたが感じる季節のことば」と題して、広く一般から“季節のことば”を募集しました。

その結果、寒暖に関するつぶやきから、行事、服装など身近な生活のこと、食べ物、植物、動物、地名・人物名まで5000件を超えるご意見（春夏秋冬の各季節1,200以上）、ことば数としては1588件（各季節400程度）のご応募をいただきました。

また、“ことば”に添えて、“ことば”にまつわる心温まる思い出なども数多く寄せられました。応募してくださった方々には深く感謝いたします。

この冊子は、「季節のことば選考委員会」が厳選した“季節のことば36選、二十四節気ひとつこと解説”や、自由な感覚で応募された“ことば”をとりまとめたものです。

どんな“ことば”が集まり、どんな“ことば”が選ばれたのか、ぜひご覧ください。

なお、今回の取り組みは、二十四節気を変えるものではありません。取り組み開始当初、「新しい季節のことば」には“日本版 二十四節気”とキャッチフレーズがついていたため、「従来からの二十四節気を否定する、変更しようとしている」というとらえられ方をされて取り組み自体に反対意見も多くでました。誤解を避けるため、取り組みを進める中で当初のキャッチフレーズは封印し、「季節を感じることば」を応募する方々の自由な感覚で記載していただきました。

季節のことば選考委員会では、一年のめぐりを二十四の言葉で表現している「二十四節気」のひとつこと解説もつくりました。伝統ある二十四節気はこれからも親しんでいきたい“季節のことば”のひとつです。

平成25年4月吉日

季節のことば36選

平成25年の春、「季節のことば36選」が選ばれました！



注：「流れ星」はペルセウス座流星群（8月中旬）が見られることから選ばれています。

おなじみのことばや、最近の風物詩となることばで一年をめぐる「季節のことば36選」は、ひと月あたり3つのことばを選んだことにちなんでつけられた呼び名です。実際には、7月は3つに絞り込むことができず、4つのことばを選定し、全37個となりました。

季節の先取り感を意識しつつ、人気のあることば（応募数の多いことば）も取り入れて厳選されました。

季節ことばのつながりが、一年をめぐる情景や人の記憶につながり、近未来（次の季節）を感じさせてくれます。

二十四節気ひとこと解説

一年を四つにわけた四季。季節のめぐり「春夏秋冬」は春からはじまります。

一年を二十四にわけた「二十四節気」は、旧暦（太陰暦）を利用していた頃からの季節暦（きせつごよみ、太陽暦）であり、全部は知らなくても代表的な“季節のことば”です。

“二十四節気の春”は二月上旬の立春からはじまり、ひと月に二節気すすみながら、翌年一月下旬の大寒までめぐります。

二十四節気ひとこと解説	
①立春	春の生まれるころ
②雨水	春の雨が降り始める
③啓蟄	地中の虫が目覚める
④春分	春のなかば
⑤清明	麗か（うららか）
⑥穀雨	穀物が芽吹くころ
⑦立夏	夏の生まれるころ
⑧小満	若葉の輝くころ
⑨芒種	麦の熟れるころ
⑩夏至	昼がいちばん長いころ
⑪小暑	暑さが厳しくなる
⑫大暑	暑さ極まるころ
⑬立秋	秋の生まれるころ
⑭処暑	暑さが衰える
⑮白露	露が白々と結ぶ
⑯秋分	秋のなかば
⑰寒露	肌寒さを覚える
⑱霜降	早霜（はやしも）
⑲立冬	冬の生まれるころ
⑳小雪	初雪（はつゆき）
㉑大雪	雪が降る
㉒冬至	昼がいちばん短いころ
㉓小寒	寒さが厳しくなる
㉔大寒	寒さ極まるころ

「二十四節気ひとこと解説」は、岡田芳朗氏、梶原しげる氏、長谷川權氏、山口仲美氏ほか「季節のことば選考委員会」によりつくられました。

【参考】二十四節気の頃

立春（りっしゅん）	2月4日頃	雨水（うすい）	2月18日頃
啓蟄（けいちつ）	3月5日頃	春分（しゅんぶん）	3月20日頃
清明（せいめい）	4月5日頃	穀雨（こくう）	4月20日頃
立夏（りっか）	5月5日頃	小満（しょうまん）	5月21日頃
芒種（ぼうしゅ）	6月5日頃	夏至（げし）	6月21日頃
小暑（しょうしょ）	7月7日頃	大暑（たいしょ）	7月23日頃
立秋（りっしゅう）	8月7日頃	処暑（しょしょ）	8月23日頃
白露（はくろ）	9月7日頃	秋分（しゅうぶん）	9月23日頃
寒露（かんろ）	10月8日頃	霜降（そうこう）	10月23日頃
立冬（りっとう）	11月7日頃	小雪（しょうせつ）	11月22日頃
大雪（たいせつ）	12月7日頃	冬至（とうじ）	12月22日頃
小寒（しょうかん）	1月5日頃	大寒（だいかん）	1月20日頃

注：日付は平成25年(2013年) 国立天文台による。

コラム1 春は何月から何月？（季節の分かれ目は？）

暦学や文学では、春は立春（2月はじめ頃）から立夏（5月はじめ頃）です。

気象的な区分では春は3月から5月ですが、春分をすぎた2月に明るい日差しや梅の開花、ウグイスの初鳴きを聞いて春を感じることができます。この先取り感は、文学的な季節感につながります。このように、暦学や文学の季節区分と気象的な（天気予報でつかう）季節の区分は少しずれています。

	気象的な区分	暦学や文学
春	3月・4月・5月	立春（2月はじめ頃）～立夏（5月はじめ頃）
夏	6月・7月・8月	立夏（5月はじめ頃）～立秋（8月はじめ頃）
秋	9月・10月・11月	立秋（8月はじめ頃）～立冬（11月はじめ頃）
冬	12月・1月・2月	立冬（11月はじめ頃）～立春（2月はじめ頃）

なお、この冊子でことばを紹介する時の春夏秋冬は、応募した人が感じたとおりです。

コラム2 今回の応募数は？

応募期間（平成24年〔2012年〕8月7日〔立秋〕～12月21日〔冬至〕、約5ヶ月間）にはがきやWebで応募された「季節のことば」の応募総数は5150件（春：1245、夏：1261、秋：1211、冬：1433）に上り、ことばの種類数としては、1588件（各季節400程度）でした。

季節のことばの種類数(表1)をみると、春は「気分」、「植物」、夏は「動物」、秋は「星空(月)」、「植物(紅葉)」、「食べ物」、冬は「雪」、「行事」に関することばが多く寄せられました。

表1 季節のことばの種類数

季節	春	夏	秋	冬
	3月～5月	6月～8月	9月～11月	12月～2月
①寒暖	9	26	17	28
②気象	28	57	23	38
③星空(月も)	2	5	14	12
④雪				24
⑤病	3	6	7	18
⑥植物	81	28	49	14
⑦動物	30	60	27	21
⑧気分	58	46	21	20
⑨生活	50	52	45	32
⑩スポーツ	8	12	13	15
⑪農業	10	7	11	4
⑫食べ物	22	26	47	34
⑬行事	25	14	27	65
⑭暦	37	28	29	40
⑮震災	16	1	1	1
⑯地名や人物	31	50	24	30
⑰不明	1	0	4	4
合計	411	418	359	400

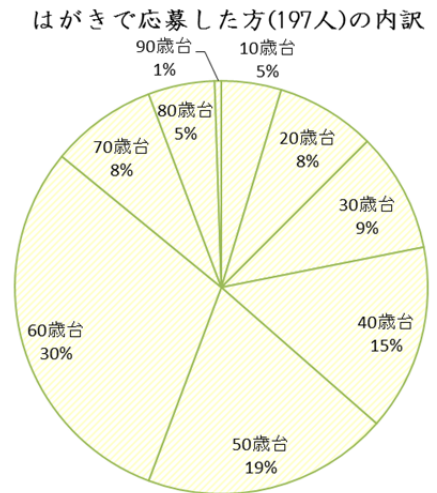
コラム3 どんな人たちが応募したでしょうか？

日本各地から応募されたはがきは276通でした。はがきで応募した方々の年齢別の内訳は右図のとおりです。60歳台が30%と最多で、次いで50歳台が19%でした。

最年少は10才、最年長は92歳の方でした。

男女比(男女の別はお名前から判断)は、男性39%、女性61%でした。

(注) Webからの応募は、名前や年齢を入力しない形式でしたので、年齢や性別はわかりません。



コラム4 春と夏、応募数の多いことばは？

応募者数の多かった春と夏のことばは次のとおりです。

「春のことば」 (数字は応募者数)	「夏のことば」 (数字は応募者数)
「入学式」(17) 「春一番」(17)	「蝉しぐれ」(19) 「夏休み」(19)
「花粉症(くしゃみなど)」(15)	「入道雲、積乱雲」(17)
「雪解け」(14)	「海水浴」(16) 「花火」(16)
「春眠(春眠暁を覚えず、眠気など)」(13)	「お盆」(15) 「七夕、七夕祭り」(13)
「春がすみ」(12) 「ふきのとう」(12)	「夕立」(11) 「雷、雷雨」(11)
「桜」(12) 「芽吹き」(11)	「夏祭り」(11) 「梅雨」(10)
「花祭り」(11) 「つくし」(10)	「ひまわり」(9) 「蝉」(9)
「菜の花」(9) 「震災」(9)	「節電」(9) 「夏至」(8)
「おぼろ月」(8) 「花吹雪」(8)	「熱帯夜」(8) 「梅雨明け」(8)
「春風」(8) 「鯉のぼり」(8)	「高校野球、甲子園」(8)

春は「入学式」と「春一番」、夏は圧倒的に「蝉しぐれ」が人気でした。

コラム5 秋と冬、応募数の多いことばは？

応募者数の多かった秋と冬のことばは次のとおりです。

「秋のことば」（数字は応募者数）	「冬のことば」（数字は応募者数）
「紅葉」(18) 「運動会」(16)	「木枯らし」(16) 「クリスマス」(16)
「落葉」(15) 「紅葉狩り」(14)	「冬至」(15) 「こたつ（こたつで丸く、こたつでみかん等）(14) 「雪かき」(13)
「冬支度」(13) 「稲刈り」(13)	「イルミネーション」(12) 「霜柱」(10)
「台風」(10) 「秋分」(10)	「白鳥、白鳥飛来」(10) 「冬休み」(10)
「いわし雲」(9) 「コスモス」(9)	「スキー」(9) 「マラソン」(9)
「夜長」(9) 「学芸会」(8)	「オリオン座」(8) 「冬ごもり」(8)
「小春日和」(8) 「キノコとり」(8)	「冬靴（ブーツ、ムートン長靴等）」(8)
「七五三」(8)	「鍋」(8) 「大掃除」(8)
「秋刀魚（サンマ）」(8)	

秋は、「紅葉」や「落葉」など彩に関することばが多かったです。冬は雪に関することばが多かったですが、多彩な言葉で表現されていた分、同じ言葉を応募した人数は少なかったです。

季節のことば36選の選考を終えて(1)

「マイ季節のことば」を選ぼう

新田 尚

応募作品の多くの「季節のことば」から決められた数のことばを絞り出す作業は大変でしたが、本当に日本人は季節に敏感だし、美しいことばで季節感として表現する、すぐれた感性をもっている人が多いと、あらためて感じました。

近年、旧暦への関心が高まっていますが、同時に「自分にとっての季節のことば」を選び出すことで、少し大げさですが、新しい文化を自分なりに創り出す希望を持ち続けたいと思います。このたび選に漏れた方々も、新しい文化創造をめざして「マイ季節のことば」への感性をこれからも磨いて下さい。その場合、先ず二十四節気などをよく見直して、そのコンパクトな表現に込められた思いを味わい、続いて自分独自の季節感覚にマッチした「季節のことば」を広く収集したり工夫したりしてみられてはどうでしょうか。

季節のことばを選んで

安達 功

昔に比べ季節感が薄れたと言われます。しかし、寄せられた多くの「季節のことば」を見ていくと、現代の日本人も生活の中の小さな変化に季節を感じ、そこに記憶をからませて歳を重ねているということであらためて感じました。

たとえば、「なごり雪」や「螢舞う」などのことばを選んだ方々は、いま降っている雪や目の前で光っている螢という事象を超えて、遠くなった「あの日」の記憶と結びついた情景を思い浮かべているのでしょうか。いくつかのことばが、どこかロマンチックな感じを帯びているのはそのためなのだと思います。

今回まとめられた「季節のことば36選」が伝統的な二十四節気とともに、四季を持つ日本人の生活にちょっと懐かしさを含んだ色合いを添えることができたらと思います。(了)

片山@国立天文台暦計算室です。

片山 真人

最初はどうなることかと思っておりましたが、いざふたを開けてみると、現代日本人の季節感もじつに多様であることがわかりました。今回選考されたもの以外にも、動物、植物、食べ物、スポーツ、最近の時事ネタ、古きよき時代ネタなど、いろいろなテーマで季節を振り返ることが出来そうです。

#うたた猫などは、情景を思い浮かべやすく、面白い表現だと思いました。

なお、オリオン座など星座を挙げた方もおられましたが、星座の多くは時間次第ではほぼ1年中見られますので、星座で季節を表現するにはいつ、どの方向に見えるかといった情報も必要です。たとえば、ふたご座の和名「かどぐい(門杭)」は旧正月の夜明け頃、ふたご座が西の空に縦になって沈んでいく様が正月の門飾りに似ていることに由来しますし、アークトゥルスが麦星・麦熟れ星・麦刈り星などと呼ばれるのは、麦が熟れる5月下旬～6月上旬頃に一晚中眺めることができる星だからです。

季節のことは36選の選考を終えて（2）

「二十四節気（にじゅうしせっき）」をふたたび

岡田 芳朗

“今日の日本人の季節感にふさわしい新しい二十四節気を考えてみよう“という趣旨の日本気象協会の提案は、社会に大きな反響を巻き起こしました。特に暦や季語に関心をもつ人達は強い衝撃を受け、早速反発する人もありました。

しかし、東洋文化の精華であり、日本の伝統や文学の根源として、天与の存在のように考えられてきた二十四節気について、改めて現代の視点から考察し直す機会を生むこととなりました。

その結果、日本の季節を表すのにふさわしい言葉を一般から募って「季節のことは36選」となり、やや難解な古代漢語を易しい日本語で表した「二十四節気ひとこと解説」としてまとまりました。

これは、これから日本人が季節を考える時に大切な拠所となるものと思われま

日本人の季節感の結晶

長谷川 權

「季節のことは36選」に「なごり雪」が入りました。春を迎えてから最後に降る雪であり、立春（二月四日ころ）をすぎて降る「春の雪」のひとつです。

そこで思い出すことがあります。欧米の留学生たちと句会をしたときのこと、「春の雪」を題に出したら困った顔をしています。わけをきくと「雪が降らなくなってからが春」「だから春の雪なんてありません」というのです。

その答えをきいて、日本では昔から立春から春であり、それ以降に降る雪は春の雪であると説明したのですが、納得がゆかないようすでした。彼らの文化では暖かくなってからが春なのです。

そのとき気づいたことは日本人は季節に敏感であり、生活も文化も繊細な季節感の上に成り立っているのだということでした。

立春は二十四節気のひとつですが、寒さ厳しい二月のはじめです。昔の日本人は今の日本人と同様「なぜまだ寒いのに春なんだ？」と不思議に思ったはずで

秋のはじめの立秋も暑いさなかの八月はじめにめぐってきます。そこで暑さのなかに秋の気配を感じとろうとした。この次の季節の兆しを探る気持ちこそが日本人の季節感をはぐくんだのではないのでしょうか。

もし欧米の人々のように暑い中は夏、涼しくなってからが秋、寒いうちは冬、暖かくなってからが春と思っていたら、繊細な季節感など育たなかっただろうと思

います。
この繊細な季節感の結晶ともいべき言葉が日本にはたくさんにあります。「なごり雪」がそうであるように、それらはみな春や秋の訪れを待ち、過ぎ去った季節のなごりを惜しむというふう

季節のことは36選の選考を終えて(3)

異常気象は心配ですが

石井 和子

どれかの季節に生まれて、(季節の) うつり、たけなわ、うつり、たけなわ・・・と何度もくり返し、いずれはどれかの季節で亡くなる。
平成24年の季節感を残しておきたくて、日本人の生活、季節のめぐりを大切にして選びました。これからも季節のめぐりを気象予報士の目線で見守ります。

季節のことは36選 ～あじさい～

明治大学教授・エッセイスト 山口 仲美

季節のことは36選を選び終わってほっとしています。合議で選ばれたこれらのことをじっと眺めていくと、日本の微妙な季節の推移や古来からの行事が目の前に浮かび、楽しい気分になります。どれも、思い出のつまった言葉なのですが、ここでは6月のことばに選ばれた「あじさい」にまつわる思い出を一つ。

「あじさい」は、在来の花ですが、地味なので私自身はさほど好きではありませんでした。でも、母親が手作りでアジサイのイメージのするワンピースを作ってくれたことがあります。濃淡のある水色と紫色からなる花模様のワンピースです。それを着て授業をすると、学生が言います。「先生、すてきだね。どこで買ったの?」「買ったんじゃないなくて、母が作ってくれたのよ。」「そうか、買えないんだあ。」あじさいに対する気持ちが変わりました。また、母が病んで歩けなくなったので、車いすに乗せて公園を散策しました。あじさいが、ワンピースさながらの色合いで咲き乱れていました。「きれいだね」。母は言いました。それから二か月して母が亡くなりました。あじさいは母の好きな花だったのです。

わたしは梶原委員!

梶原しげる

「池袋のイベントで金田一先生がおっしゃってたく移ろう季節を先取りする事で、現実の暑さや寒さ、花粉症、じめじめなど、現下の季節的困難を克服しようとする日本人の知恵」というご趣旨のお言葉に勝手に共感しつつ、言葉選びをいたしました。加えて、言葉から、多くの方が「光景が様々に見えて来る」という言葉の持つ「ビジュアル性」も重視いたしました。

注:池袋のイベント:第4回日本気象協会メセナ「季節のことは、今昔物語」2012年8月31日(金)開催

第一部 「ことばと暦の歴史」司会 梶原しげる氏(フリーアナウンサー) 望月圭子氏(気象予報士)

出演 石井和子氏(元TBSアナウンサー 日本気象予報会顧問) 岡田芳朗氏(暦の会会長)

片山真人氏(国立天文台暦計算室長) 三遊亭右京氏(落語家)。

第二部 「お天気キャスターのことばの使い方」ゲスト 金田一秀穂氏(杏林大学外国語学部教授)

お天気キャスター出演 天達武史氏 南 利幸氏 福富里香氏

関連イベント:第3回日本気象協会メセナ「日本版二十四節気、～新しい季節のことは～」2010年2月10日(金)開催

日本の気候や日本人の季節感などについての座談会 出演 岡田芳朗氏(暦の会会長)

梶原しげる氏(フリーアナウンサー)、長谷川権氏(俳人・朝日俳壇選者・きごさい代表)

前田修平氏(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課 予報官)

季節のことは選考委員



選考委員長 新田 尚

1955年、東京大学理学部地球物理学科卒業。1965年、理学博士(東京大学)。1990年、気象庁予報部長。1992年、気象庁長官。1993年から2000年までは東海大学教養学部特任教授。

専攻: 天気予報技術(数値予報論)、大気大循環論

著書: 「大気大循環論」(東京堂出版)、「新気象読本」(東京堂出版)、「気象情報の読み方・使い方」(オーム社)、「異常気象の謎」(大日本図書)など。(共著)「気象学百年史」(東京堂出版)、「数値予報と現代気象学」(東京堂出版)。(監修)「身近な気象の事典」(東京堂出版)。

受賞: 日本気象協会岡田賞(1976)、日本気象学会藤原賞(1982)

日本の豊かな四季の移ろいが、日本人の季節の進行に対する鋭い感性を育てたといえますが、二十四節気(七十二候)はその象徴といえるでしょう。中国起源の言葉遣いも必ずしも一般になじみ深いとはいえないこの二十四節気が、現在も広く日本の社会に浸透していることは、それを物語っていると思います。その一方で、若い人を中心に二十四節気という言葉がピンとこないともいわれています。

過日、私は神田の某大書店の売場案内の若い女性に「二十四節気関連書物の売場」を尋ねたところ、「二十四節気って何ですか」と問われました。気象協会のこの度の提案が、こうした事情を改善し、我々の感性に一層みがきをかける上で役立つことを願っています。



安達 功

1978年4月、時事通信社入社

社会部記者、パリ特派員、社会部長、編集局次長などを経て2011年10月、編集局長。



石井 和子

学習院大学文学部仏文科卒業。TBSアナウンサーを経て、現在はフリーアナウンサー。気象予報士、学術博士、気象予報士会顧問、桜美林大学講師。海洋大学経営協議会委員、白山朗読の会主宰。

著書: 『平安の気象予報士 紫式部』(講談社プラスα新書)



岡田 芳朗

1930年、東京市日本橋区生まれ。1953年、早稲田大学教育学部卒業。1956年、同大学大学院修了。女子美術大学教授、文化女子大学教授を経て、現在、女子美術大学名誉教授、暦の会会長、日本カレンダー暦文化振興協会顧問。

専攻: 日本古代史、暦文化史

著書: 「日本の暦」(木耳社、新人物往来社)、「アジアの暦」(東京堂出版)、「明治改暦」(大修館書店)、「旧暦読本」(創元社)、「現代こよみ読み解き事典」(柏書房)他多数。



片山 真人

1994年、東京大学教養学部基礎科学科第一卒業。1996年、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。1996年、海上保安庁水路部航法測地課。2005年、国立天文台天文情報センター暦計算室、2007年、同暦計算室長。

専攻:天体力学

著書:「(共著)『現代の天文学 13 天体の位置と運動』(日本評論社)、『理科年表シリーズ よくわかる宇宙と地球のすがた』(国立天文台編 丸善)、『太陽系大地図』(小学館)。(監修)『グレゴリオの迷宮～暦の科学～』(サイエンス チャンネル)など。



梶原 しげる

1950年7月26日生まれ。神奈川県茅ヶ崎出身。早稲田大学法学部を経てラジオ局文化放送にアナウンサーとして入社。1992年からフリーへ。49歳で東京成徳大学大学院心理学研究科に進学し、心理学修士号取得。他に認定カウンセラー、健康心理士、シニア産業カウンセラーの資格を持つ。その資格「産業カウンセラー」がNHK Eテレ「資格☆はばたく」10月放送(2011)で取り上げられて、カウンセラー兼講師役として出演。また、(社)日本青少年育成協会内に自身のカウンセリングルームを開設し、不定期にクライアントの相談に応じている。2006年から東京成徳大学応用心理学部客員教授に就任。書籍では2003年秋に出版した新潮新書「口のきき方」が15万部を越え、2006年度からの中学の国語教科書「伝え合う言葉 中学国語1」(教育出版)に採用される。2009年より、五木寛之氏、立松和平氏らと日本語検定審議委員に選出され就任。日本語検定評価委員も兼務。専攻:応用心理学



長谷川 權

熊本県生まれ。東京大学法学部卒業。読売新聞記者を経て、俳句に専念。朝日俳壇選者、「季語と歳時記の会」代表、東海大学文学部文芸創作学科特任教授。1990年、『俳句の宇宙』でサントリー学芸賞、2003年、第五句集『虚空』で読売文学賞受賞。

著書:『俳句的生活』(中公新書)、『古池に蛙は飛び込んだか』(花神社)、『「奥の細道」をよむ』(ちくま新書)、『決定版一億人の俳句入門』(講談社現代新書)、『和の思想』(中公新書)、『句会入門』(講談社現代新書)、『子規の宇宙』(角川選書)、『震災歌集』(中央公論新社)。<句集>『長谷川權全句集』(花神社)、『新年』(角川書店)、『富士』(ふらんす堂)、『鶯』(角川学芸出版)。



山口 仲美

1969年、東京大学大学院修士課程修了。文学博士。現在一明治大学国際日本学部教授

専攻:日本語学(特に、日本語史、擬音語・擬態語研究)。日本古典文学(特に、平安文学)

著書:「平安文学の文体の研究」(明治書院)、「ちんちん千鳥の鳴く声」(講談社学術文庫)、「犬は「びよ」と鳴いていた」(光文社新書)、「日本語の歴史」(岩波新書)、「若者言葉に耳をすませば」(講談社)、「暮らしのことは 擬音・擬態語辞典」(講談社)、「すらすら読める今昔物語集」(講談社)、「すらすら読める枕草子」(講談社)、「中国の蟬は何と鳴く?」(日経BP社)、「新・にほんご紀行」(日経BP社)など、言葉や古典文学に関するエッセイも多い。

受章:日本古典文学会賞・金田一京助博士記念賞・日本エッセイストクラブ賞。

2008年秋 日本語学の研究で紫綬褒章を受けた。メディア:NHKテレビ「爆問学問」「視点・論点」、日本テレビ「世界一受けたい授業」、TBSテレビ「教科書に載せたい!」などで活躍。

おわりに

「なぜ季節のことばか？」

本当に何もなくなつたとき、心を支えてくれるものがあります。人との絆や私たちが育ててくれた環境や時間です。長い間生活するうちに身についた季節感も心を支えるもののひとつです。防災や減災、災害からの復旧のためには常に最新の知識が必要です。あわせて「季節感」という心の豊かさも持ち続けられたらという思いでこの企画を終えました。



(企画) 一般財団法人 日本気象協会メセナ

おもいでは みらいへつづく おくりもの
きせつとともに めぐりめぐりて
季節のことば36選

「季節のことば36選」選考

季節のことば選考委員会

新田 尚 (委員長) 安達 功 石井 和子 岡田 芳朗

片山 真人 梶原しげる 長谷川 權 山口 仲美

一般財団法人 日本気象協会

小林 堅吾 (理事長) 古山 享嗣 鍋島 秀孝 宇治 裕幸

金丸 努 田口 晶彦 折坂 章子 藏田 英之 山本 有子

「二十四節気ひとこと解説」作成

岡田 芳朗 梶原しげる 長谷川 權 山口 仲美

ほか 季節のことば選考委員会

表紙 やまもとゆうこ